

2017年度 FD 活動評価点検報告書

1. 中部大学の FD 活動組織について

本学における教育活動・改善に向けた教員の資質向上策としての FD (Faculty Development) 活動は、学長を委員長とした全学 FD 委員会のもと、各学部 FD 委員会および各学科組織があり、全学体制の FD 活動ワーキングが中心となって種々の検討を行っている。また、教育活動顕彰審査選考委員会や FD 活動評価点検委員会が図 1 のように組織されており、FD 活動の内容について評価できる体制が整っている。なお、全学 FD 委員会および学部 FD 委員会は、2007 年度まで本学に設置されていた FD 推進委員会、学部での FD に関する諸活動を 2008 年度より新しく改変した組織である。また、大学教育研究センター（教員 3 人、事務員 4 人で構成）が主管部署として、FD 活動の推進、支援を行っている。

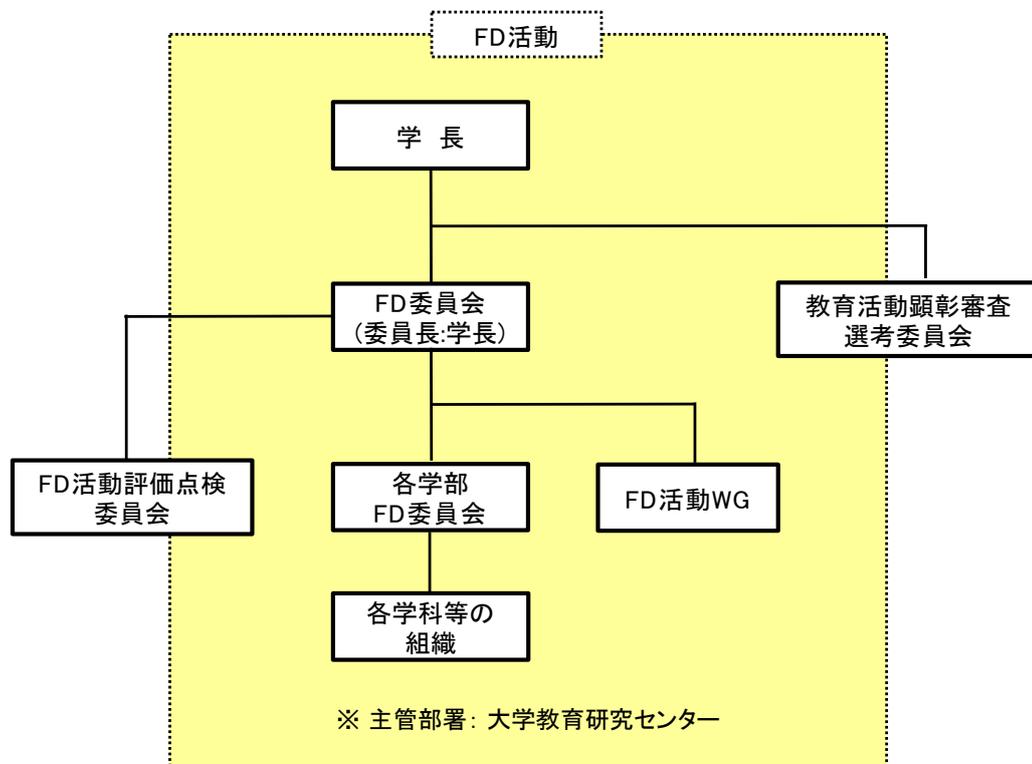


図 1 中部大学の FD 活動組織図

FD 委員会 : 本学の FD 活動全般について、学長を委員長として審議、検討をする。

FD 活動 WG : FD 委員会の専門委員会として、学部代表の FD 委員を中心に主に全学的な活動を企画する。

FD 活動評価点検委員会 : 本学の FD 活動全般について、第三者的な立場にたって評価点検をする。

教育活動顕彰審査選考委員会 : 教育活動顕彰制度に係る重要事項、および受賞者の審査、選考する。

2. 本学の FD 活動評価点検の対象

本学の FD 活動は、次の表に示すように 3 つの観点から分けられる。広義の FD 活動の目的となりうる「カリキュラム改善」や「組織の整備・改革」に関する諸活動は、FD 委員会の所掌事項でないため、これらを目的とした活動（網掛け部）は、本報告書の内容には含めていない。なお、授業担当者のみの授業改善の活動は、「教育活動重点目標・自己評価シート」と「学生による授業評価、教員による授業自己評価」によって実施され、後者は学内向けに HP 上で公開されている。

表 1 3 つの観点でみた中部大学の FD 活動

【※1】 3 つの観点でみた中部大学の FD 活動（網掛け項目は除外する項目を表す）

目的別にみた FD 活動	対象別にみた FD 活動	形式別にみた FD 活動
1) 授業・教授法の改善	1) 全学対象	1) 会議
2) 教員の資質向上（研究交流を含む）	2) 学部・研究科対象	2) 研修会・懇談会
3) FD 活動の企画・運営など	3) 学科・教育科対象	3) 講演・報告会
カリキュラム改善	(*1) 非常勤を含む	4) ワークショップ・セミナー
組織の整備・改革	(*1) 学生を含む	5) 制度・システムなど (*2)
	授業担当者	

(*1)：対象別 1)～3) で非常勤を含む場合、学生を含む場合

(*2)：授業評価システム、授業改善アンケートの制度の運用やシステムの構築、および出版などが該当

3. 2017 年度の FD 活動の重点目標

FD 活動の重点目標として 2008 年度より 5 年間を目安とした『魅力ある授業づくり』は、2013 年度以降も重点目標とすることが 2012 年度の FD 委員会で決定され、以下の考え方をもとに 2017 年度も継続して FD 活動を進めてきた。

『魅力ある授業づくり』は、学生と教員が協同して行うものです。

魅力ある授業・・・（学生にとって）興味を持って聴ける授業、将来において役立つ授業
 （教員にとって）学生の成長を実感できる授業、学生から感化を受ける授業
 授業づくり・・・（学生が目指す）自主的に学ぶ態度、知識・技術の修得
 （教員が目指す）授業改善、授業スキルアップ
 （学生と教員が目指す）双方向のコミュニケーション

本学では、評価点検の結果から改善を繰り返し、個人レベルから、学部学科を越えたグループ、学部学科、全学を対象に活発な FD 活動を進めてきた。こうした中、教育実践現場である各学部では、以下のような FD 活動の目標設定を行い、FD 活動に積極的に取り組んだ。

(1) 工学部・工学研究科

FD 講演会等に積極的に参加し、『魅力ある授業づくり』を理解し着実に実行する：

- ① 中部大学教育活動顕彰制度受賞者による講演
- ② 『魅力ある授業づくり』に関する企画の開催
- ③ 全学実施の FD 関連プログラム等への参加・連携・情報共有
- ④ 工学研究科の教育目的実現に向けた専攻横断的な研究交流機会の開催
- ⑤ 教員の英語力向上により英語開講科目の増加につなげる

(2) 経営情報学部・経営情報学研究科

- ① 夏の教育活動顕彰制度で表彰された先生を中心とした秋学期に表彰記念報告会による全教員における『魅力ある授業づくり』に関する情報の共有
- ② 専門の講師を招待した経営情報学部主催の FD 講演会の開催に基づいた今後の FD 活動の指針づくり
- ③ 『魅力ある授業づくり』の基礎をなす「学生による授業評価」への参加率向上

(3) 国際関係学部

授業・教授法の改善のため：

- ① 英語や中国語を活用した「専門科目」講義の実施
- ② 「フィールドワーク」を中心とする学外での教育活動の展開
- ③ 「国際関係学部 Web ポートフォリオ」の一層の活用
- ④ 新学科 1 年生用カリキュラム充実のため、学科会議や教授会を最大限に活用

新しい国際関係学部に向けての運営のため：

- ① 学部新体制において、学生指導、教員組織の運営体制等の蓄積を活用した新たな対応の検討の実施と、学部内の認識統一と問題意識の共有、重要事項の周知徹底

(4) 人文学部

- ① 高校と大学との連携を強化し、スムーズな大学教育への移行
- ② 学生の主体性を育成する双方向型授業を取り入れた魅力ある授業づくりの実現に向けた取り組み
- ③ 学生と教員によるフィールドスタディ等を通じて春日井市を中心とした地域社会との連携の強化

(5) 応用生物学部・応用生物学研究科

学部：FD 活動の見える化、共有化を目指す：

- ① 『魅力ある授業づくり』に関して、授業改善につながる学部内での報告会、意見交換会の計画
- ② 『魅力ある授業づくり』に関して、学生による授業評価、教員による授業自己評価、コメントへの回答率向上を具体的目標とした学部全体での継続的な取り組み
- ③ 『魅力ある授業づくり』に関して、各教員の授業改善に関する重点目標、および授業評価コメント一覧の良かったところ、改善点等を参考とした自己の授業改善
- ④ 多様化する学生対応に向けた学生サポート関連分野の専門家による講演会の開催

⑤ 各教員の全学 FD 講演会その他の全学レベルの FD 支援活動への積極的な参加
研究科：研究科委員会等を通じ定期的に FD 情報の交換と必要に応じた目標の設定

(6) 生命健康科学部・生命健康科学研究科

学部：春学期終了後の授業反省会による学部共通科目を中心とした講義の内容、工夫など、
『魅力ある授業づくり』についての検討

研究科：大学院特論等における授業評価アンケートの実施と担当教員で結果の共有による授業改善

学部・研究科：秋学期終了後、全員を対象とする FD 講演会の開催

(7) 現代教育学部・教育学研究科

学部：

- ① 現代教育学部教員の『魅力ある授業づくり』のための力量向上
- ② 学部における現状の課題の共有
- ③ 新しい大学教育、特に新学習指導要領に対応したカリキュラム開発の研究

研究科：

- ① 学部、現代教育学研究所と連携した授業改善と大学院教員の資質向上
- ② 研究交流会の実施による教員組織の体制化
- ③ 教育モデル構築の取り組み
- ④ 院生への情報提供ネットワークの活性化

(8) 全学共通教育部

- ① 教育科を越えた FD 活動のあり方の議論
- ② 教員間の共通理解の形成（懇談会・研修会・教材提供等による）
- ③ 『魅力ある授業づくり』等に向けた学外研修会・教育関連学会等への参加
- ④ 教育経験の浅い教員と深い教員の交流・指導を通じた FD 活動の展開
- ⑤ 第 2 クール 3 年目として全学共通教育科目の『魅力ある授業づくり』のための一層の改善（授業教授方法・授業内容・体制・施設・設備等の改善・充実と学外の研究会・ワークショップへの参加によるスキルアップ等）、科目の精選に関する考察
- ⑥ 「高大連携・接続」の一環として高校（生）にとっての『魅力ある授業づくり』の検討

(9) 国際人間学研究科

- ① 外部との接触・交流による研究・教育能力の向上を目的とする FD 活動
- ② 内部における相互交流による啓発・啓蒙を目的とする FD 活動

この 2 方向から FD 活動を推進し、研究科全体のレベルアップを図る

FD 活動の重点目標である『魅力ある授業づくり』は 10 年目となり、授業評価回答率のアップや授業力向上などのこれまでの目標を継続している。また、組織独自の試み・具体的な対策が多くみられ、『魅力ある授業づくり』が浸透してきているものと判断される。その中で、共通

するものとして組織内の情報共有の具体策が試みられており、FD 活動の重要な根幹が窺える目標であると思われる。

4. 2017 年度の FD 活動の取り組み

4. 1 全学の取り組み

2017 年度の全学としての取り組みは、大学教育研究センターHP に詳細が掲載されている (<https://www.chubu.ac.jp/FD/>)。主な取り組みは、(1) 教員による教育活動重点目標の設定および自己評価 (2) 授業改善の取り組み (3) FD フォーラム・講演会 (4) キャリアアッププログラム・FD に関する研修会等 (5) FD カフェ (6) 出版物 (7) 教育活動顕彰制度 (8) 中部大学『魅力ある授業づくり』プログラムの実施 (9) FD オンデマンド講義 (全国私立大学 FD 連携フォーラム実践的 FD プログラム) の提供等である。また、2017 年度の企画として 4 年前にも実施した(10) 第 2 回『魅力ある授業づくり』作品コンクールを開催し、(11) 第 2 回「学修成果に関する調査」の結果に関する各組織からのまとめの全学共有、(12) 授業運営に関する調査を実施した。なお、これらの現状と評価を記述する。

(1) 教員による教育活動重点目標の設定

教員個人の FD 活動を自己点検することを主な目的として全学の助教以上に提出を求めている教育活動重点目標・自己評価シートは、年度初めに、各教員が教育活動重点目標を設定し、年度末に自己評価を行っている。2017 年度の目標設定者は在籍教員の該当者 483 人中 481 人、自己評価提出者は目標設定者 481 人中 472 人（未提出者 9 人は退職、欠勤等により提出できない者）であった。なお、近年の内部質保証の観点から、教育のみならず研究、社会貢献、学内行政等についてもそれぞれの活動について評価・点検の実施、改善向上が求められており、従来の教育に係る事項に重きをおいてきた当シートの見直しを図り検討を重ねた。その結果、「教員活動重点目標・自己評価シート」と名称変更し、大学教員としての 4 つの責務(教育・研究・社会貢献・学内行政)についても、それぞれ自己評価を実施した。2018 年度から大学設置基準上で教員と区分される助手（教育・研究の補助を主たる職務とする）も対象とし、これを機に全学部共通のレイアウトに変更となった。

(2) 授業改善の取り組み

『魅力ある授業づくり』のための主な取り組みとして、以下の 7 つに取り組んできた。

① Web による「学生による授業評価」「教員による授業自己評価」

2017 年度、「授業評価」の学生の回答率は、春学期約 33%、秋学期約 24%、教員の自己評価回答率は、春学期約 62%、秋学期約 60%であった。学生の回答率は、2016 年度春学期の約 33%、秋学期の 24%と横ばいであった。毎年、秋学期の学生回答率は、春学期に比べて減少という傾向は同様であった。自由記述においては、春学期 2,980 件であり、2016 年度より 3.4%減少したが、秋学期は 1,750 件であり、2016 年度より 13%減少しており、この数年減少傾向にある。一方、『授業評価の結果に対する教員コメント』については、コメント教員数が 2016 年度と比較して春学期で 30 名増加の 501 名、秋学

期で26名増加の480名であった。さらにコメント率は、春学期は62.5%（2016年度59.6%）で増加、秋学期は60.5%（2016年度59.2%）で微増している。

授業評価の回答率については、例年同様に学科による違いが大きい点はあるが、その傾向は少なくなってきた。学部・学科としての取り組み、認識の差がまだ認められるが、少しずつ大学全体で学生への働きかけの意識が高まってきている。

② 携帯電話を活用したクリッカーシステムの提供（授業改善アンケートシステム）

携帯電話やスマートフォンを活用して、授業中に教員がネット環境を使える場所であれば、学生の反応を瞬時に把握できる本学独自のクリッカーシステムである「Cumoc（キューモ：Chubu University Mobile Clicker）」を導入して8年目となる。2011年7月には、利用の研修を行う目的で「CumocL」を整備し、同システムを活用して2013年4月に一般的なアンケートシステムとして学内に提供を開始した。また、2017年度より、それぞれの設問間のクロス集計が可能になるよう改善した。

なお、「授業改善アンケート（Cumocの利用を含む）」は、春学期83件、秋学期73件で合計156件（2016年度226件）の利用であった。

③ 授業改善ビデオ撮影支援制度

授業担当者からの希望による授業ビデオ撮影支援制度の2017年度実績は11件（2016年度11件）で、授業サロンにおける授業担当者の振り返りのための撮影10件（2016年度10件）を含んでいる。

④ 授業のオープン化制度

授業担当者に申し出ることで、他の教員が授業を参観できるシステムであり、後述の「全学公開授業」「授業サロン」もこの趣旨を基に実施している。

⑤ 全学公開授業

「全学公開授業」を2件（2016年度1件）実施し、14人（2016年度10人）の教職員の参加があった。

⑥ 授業サロン

専門が異なる学部を越えた5人の教員による授業見学とピアコンサルティングを行う「授業サロン」が春学期1グループ、秋学期1グループ（2016年度、春学期1グループ、秋学期2グループ）実施され、授業の振り返り、また授業改善のヒントになる点などが意見交換された。今回で22グループとなり、延べで110人の専任教員が参加したことになる。FDネットワークの構築に繋がり、本学のFDの特徴を表す取り組みとして定着している。

⑦ CUループリックライブ러리

教育の質保証を目指す上での成績評価方法の1つであるループリックの「蓄積」から「共有」、そして「作成支援」に繋げることを目的として、2016年3月に運用を始めた。2017年3月までに非公開を含めて16件の登録があった。

(3) FDフォーラム・講演会

- ①「10年後、20年後の大学教育を考える～AIは人の生き方を変える?!～」をテーマにFDフォーラムを1回、②「内部質保証の実質化に向けて—第3期認証評価の要点—」、③「学

修成果の可視化に向けて「今、問われる学修成果のかたち」をテーマとする計2回のFD講演会が開催された。①では、AI導入時代に対する高等教育の在り方を、外部からの4名の講師、大学トップ、企業、入試塾、FD研究者の立場からのディスカッションが行われ、内容は学内広報誌「ANNTENA」で報告された。②では大学基準協会の事務局長を迎えて第3期認証評価の要点を中心に内部質保証の実質化に向けて教職員の意識改革に向けての講演、③では、学修成果の測定例をもとに求められている学修成果の可視化についての講演であり、いずれも日々の教育現場での応用が期待されるテーマが扱われている。

各フォーラム・講演会には、124人、112人、65人、と多くの教職員が参加した。なお、2015年の講演会からは、テーマに応じて県下の大学をはじめ、他の大学にも案内を行っており、学外からの参加者はそれぞれ、15人、7人、9人であった。

(4) キャリアアッププログラム・FDに関連する研修会等

2009年度から開催してきた「教員キャリアアッププログラム」は、教員の授業スキルを含めた「授業改善」に関連したプログラムはもとより、「ICT(情報技術)」「学生への対応」など幅広い目的のワークショップである。教職協同のプログラムとして、職員も参加し実施してきた現状を踏まえ、2017年度から、「キャリアアッププログラム」と名称を変更することとなった。

2017年度は、9回開催した。当センター客員教授による「授業技術(話し方)」に関するプログラム(3回)をはじめ、学外講師・学内講師を招いた「授業デザイン」のプログラム(1回)、「学生対応」プログラム(3回)、さらに当センター教員によるCumoc活用に関する「授業運営・ICT」プログラム(2回)を開催した。

いずれも、本学のキャリアアッププログラムのプログラムメニューとしては充実しており、形態もシステムティックに開催している。新たに大学に赴任する教員をはじめ、繰り返し開催することで非常勤講師、職員を含めた多くの教職員が体験できるプログラムとなっている。

また、毎年行われる年度初めの新任教員説明会では、学長、教務部長、学生部長、大学教育研究センター長などから、本学の建学の精神、大学理念、本学のFD活動等を説明している。

キャリアアッププログラムの参加者に非常勤講師が多いことも本学の特徴である。

(5) FDカフェ

FDカフェは、教職員による自由な意見交換の場である。大学教育に関するさまざまなテーマ、学生と直面している必要な知識などの実践的なテーマに関して自由に意見を交わすことで情報やスキルを共有する場を提供することを目的として開催されている。2017年度は春学期2回(2016年度2回)、秋学期2回(2016年度3回)の計4回開催された。そのうち、第1回は、新任教員向けに大学内における疑問解決のための情報交換として、春学期冒頭に開催された。第3~4回は、2015年度より続く「私の授業づくり」シリーズとして、主に教育活動顕彰制度で表彰された教員を講師に招いて開催した。

(6) 出版物

『教育・研究活動に関する実態資料』及び『中部大学教育研究』を刊行している。前者は、様々な基礎データを集約し、学内各種制度や対外的な申請や審査の基礎資料として、また大学の情報公開のための基礎資料として活用されている。後者は、1979年より刊行されてきた『教育資料』を充実させ、新時代の大学教育の理念・手法・改善策などを論じ合う場を提供するものとして、教育改善・質的向上に役立てることを目的に2001年から刊行している。教員の情報共有の場ともなっており、特に研究論稿は教育研究の分野でも数多く引用される実績を有している。『中部大学教育研究』No.17から論文の投稿区分を見直し、要約・キーワード・英文タイトル等の追加、およびレイアウトの変更と、編集・投稿要項を改訂した。その結果、一般投稿が23編と2016年の約2倍に増加した。また、2017年度は『魅力ある授業づくり』を重点目標に定めて10年目となることから、今まで推進してきたFD活動（各種FDプログラム）について、大学教育研究センター客員教授の協力を得て検証がなされ、研究論文としてNo.17にて掲載発表した。

(7) 教育活動顕彰制度

2008年度より学部における評価項目の重みを増加し、また個人だけでなく団体、グループに対しても表彰できる特別賞を取り入れた「教育活動顕彰制度」を導入し、毎年前年度の教育活動について表彰しており、2016年度の「教育活動優秀賞」は17人（2015年度17人）、「教育活動特別賞」は、2人（2015年度は該当なし）が受賞する結果となった。実施要項、選考総評等はHPで公開されている。また、中部大学教育活動顕彰制度における教育活動優秀賞の4回目の受賞者に対して教育活動金虎賞（きんとらしょう）を制定した。

(8) 『魅力ある授業づくり』プログラム

すべての教員（特に教育歴の少ない教員や新たに本学に赴任する教員）が持続的に教育力の向上を目指すことを奨励し、FDプログラムへの積極的な参加を奨励するために、FD委員会が主催しているFDプログラムを活用して規定の要件を満たしたものに対して、本プログラムの修了証を授与している。修了の要件については、リーフレットやHP上で公開されており、3年間の間に授業サロンまたは全学公開授業実施を必須としたポイント制をとっている。2017年度には7人の教員に修了証を授与した。本学の特徴あるFDプログラムへのさらなる積極的な参加を促すきっかけになることが期待される。

(9) FD オンデマンド講義（全国私立大学FD連携フォーラム実践的FDプログラム）

FD オンデマンド講義は、本学が加盟している全国私立大学FD連携フォーラムが運営している実践的FDプログラムを活用したものである。同プログラムは、毎年4月に視聴希望者を募り、教員が自らの授業を専門分野と教育学の観点から省察できる知識、技能、態度、アクティブ・ラーニングを実践する能力を修得するプログラムである。2017年度は30人の個人（2016年度個人36人、2組織）が受講した。引き続き、啓発の機会として活用されることが期待される。

(10) 第2回『魅力ある授業づくり』作品コンクール

本学の教育活動重点目標である『魅力ある授業づくり』を更に推し進め、学生・教職員がともに授業を考えるきっかけづくりとして、2013年度に開催した作品コンクールの第2回目を、2017年度も同様、学生を対象に『魅力ある授業』をテーマとして募集を行った。その結果、小論文・エッセイ部門 16 作品、俳句・短歌部門 17 作品、計 33 作品の応募があった。これらの作品から、教学に関わる教職員 28 人と学生公募審査員 23 人、教職員公募審査員 26 人による第1次審査、学長を委員長とする FD 委員会による第2次審査を経て、11 作品を優秀な作品として決定した。受賞作品集を冊子として作成、配付（HP でもデジタルブックにて公表）した。また、学長を囲んでの受賞者との懇談会が開かれ、本学の『魅力ある授業』について学生の率直な意見を聴ける場を設けた。

(11) 第2回学修成果に関する調査結果公開

本学の教育における質の保証について個々の授業の評価である「学生による授業評価」「教員による授業自己評価」とは別に、「学生の主体的な学び」に向けての状況や学生の学修成果に関する状況について把握し、組織としての今後の教育内容を検討する資料とすることを主な目的として、2016年度末に第2回「学修成果に関する調査」を実施した。その結果について、各組織からの結果に対するまとめを全学で共有し、ホームページ上にて公表した。

(12) 授業運営に関する調査結果公開

学士課程教育の質的転換としてアクティブ・ラーニングが取り上げられているが、本学の個々の教員が実際に授業の中でどのようなアクティブ・ラーニングの手法を取り入れているのか現況を明らかにし、今後の教育内容や組織的な FD 活動等を検討する情報とすることを主な目的として授業運営に関する調査（アンケート調査）を実施した。調査を行うに当たっては、アクティブ・ラーニングに対する教員の認識の違いを避けるため、アクティブ・ラーニングの手法をイメージしつつ、あえて「反転授業」「PBL」などの専門的な用語を使わずに設問を設定した。集計結果については大学教育研究センターホームページ上にて学内外に向けて公表した。

4. 2 学部・研究科での取り組み

各学部・各研究科において FD 活動評価点検報告書が作成されており、ここには提出された報告書から 2017年度の学部・研究科・学科での FD 活動の特記すべき事項を (1) 授業・教授法の改善に関する取り組み (2) 研究交流を通じた教員の資質向上の取り組み、の2つの目的別にまとめた。

(1) 授業・教授法の改善に関する取り組み

- ① 研修会・懇談会の開催（工学部・経営情報学部・国際人間学研究科・生命健康科学部・教育学研究科・全学共通教育部）
- ② 講演会・報告会の開催（工学部・人文学部・応用生物学部・生命健康科学部・現代教育学部/教育学研究科・国際人間学研究科・全学共通教育部）

- ③ ワークショップ・セミナーの開催（工学部・応用生物学部）
- ④ 新学科への対応に関する教員連絡会・検討会等（経営情報学部）
- ⑤ その他
 - 1) 教育活動顕彰制度受賞者による講演会・情報交換会の開催（工学部・応用生物学部）
 - 2) 春学期終了時の「授業反省会」開催を通じた教育活動への PDCA サイクル導入（生命健康科学部）
 - 3) ゼミ配属終了後の配属に関する学生アンケート（国際関係学部）

(2) 研究交流を通じた教員の資質向上の取り組み

- ① 研修会・懇談会の開催（国際人間学研究科・全学共通教育部）
- ② 講演会・報告会の開催（現代教育学部/教育学研究科・全学共通教育部・国際人間学研究科）

各学部・研究科から寄せられた FD 活動に関する課題として、積極的な参加の推進、年間を通じた活動の継続などは共通している。一方で、個々の教員の FD 活動は専門分野の研究交流に関わる取り組みに偏っていく傾向もみられる。頭打ちとなってきた組織としての FD 活動が本学教職員の情報共有の場として重要であることを再認識し解決に向けて努力することが挙げられる。

4. 3 2017 年度の FD 活動の取り組みの傾向

2017 年度の本学の FD 活動の目的別、対象別、内容形式別にまとめたのが次の 3 つの表である。2013 年度以降、「会議」や「打ち合わせ」はデータから除外している。

FD 活動の目的と対象は、バランスがとれていると考えられる。2016 年度に比べて「教員資質向上のための研究交流」が減ったものの、「授業・教授法の改善」「FD 活動企画・運営」が増加し、全体として増加した。これは、個々の専門分野に偏ったものから組織の FD 活動への取り組みが重要視されてきたとも受け取れる。

対象別にみれば、「全学対象」および「学部・研究科対象」はほぼ横ばいに対して、「学科・教育科対象」の活動が 9 件増加している。また、「学生を含む」FD 活動の取り組みも 2016 年に比べて増加しており、「非常勤講師を含む」をも考慮すると大学教育への参画者に向けた FD 活動の広がりが窺える。

形式別にみれば、2016 年度から合計が減っているようであるが、形式で重複したプログラム減少したこと、全学的に制度・システムと 4 年ごとに行われる『魅力ある授業づくり』作品コンクール、学修成果アンケート、学部等のシステム・制度として増加したことが挙げられる。

表 2.1 目的別にみた FD 活動（件数）

目的	2017 年度	2016 年度	2015 年度	2014 年度
授業・教授法の改善	66	57	67	66
教員資質向上のための研究交流	39	49	57	40
FD 活動企画・運営	16	13	20	21
	121	119	144	127

表 2.2 FD 活動の対象別にみた FD 活動 (件数)

対象	2017 年度	2016 年度	2015 年度	2014 年度
全学対象	47	49	59	52
学部・研究科対象	23	23	21	30
学科・教育科対象	26	17	36	30
	96	89	116	112
* 表 2.2 のうち、非常勤講師を含む	40	39	45	35
* 表 2.2 のうち、学生を含む	21	14	24	23

表 2.3 形式別にみた FD 活動 (件数)

内容形式	2017 年度	2016 年度	2015 年度	2014 年度
研修会・懇談会	21	32	31	29
講演・報告会	44	42	62	59
ワークショップ・セミナー	16	23	25	27
制度・システムなど	19	15	15	12
	100	112	133	127

※ 上記の 3 表の合計件数は、重複項目があるため、一致しない。

5. FD 活動に関する課題と今後の計画

2008 年度から『魅力ある授業づくり』の重点目標を掲げて 10 年経ち、FD 活動への意識も大学全体で共有されてきていると判断できる。

また、大学全体では、個々の授業・教授法の改善といった FD 活動はルーチン化され、その成果は授業評価結果との分析から『中部大学教育研究』や大学教育学会において、発表されている。一方、学部・研究科・学科・教育科での FD 活動は組織によって差が大きいものと思われる。この原因として専門分野の特徴が影響していることも否定できないが、同じ大学の基本理念・使命・教育目的のもと、学生を育てていく上で、組織としての FD 活動の認識を教職員の中で高めていく必要があり、今後、各組織の対応に期待される。

今後の計画としては、教員を対象とした FD 活動プログラムに、これまでも大学職員も参加していたが、今後、大学人としての資質向上を目指した、FD 活動と SD 活動とのかかわりを視野に入れた積極的な取り組みの実施と、教育の質保証として学生の成績評価を客観的なものにするための方策と、教員意識の啓発を進めていく。